



特集 文楽



歴史

発祥は17世紀末の大阪

15世紀に「浄瑠璃」が始まり、当時は琵琶の伴奏に合わせて盲目の法師が語り聞かせていましたが、16世紀になって三味線に替わり、音楽的、文化的にも大きく進展していきます。これを人形劇に使ったのが人形浄瑠璃といわれています。その後浄瑠璃はいくつもの系統が生まれています。特に今日、浄瑠璃の代名詞ともいわれる「義太夫節」というのは、17世紀末頃、浄瑠璃の語り手の天才といわれた竹本義太夫の名から由来しています。義太夫は大阪道頓堀に竹本座を作り、名作者近松門左衛門と組み数々の名作をつくり出しました。そして新しい浄瑠璃のジャンルを確立させていったのです。享保・延享・寛延の頃には竹本座と豊竹座が競い合い、全盛期を作り上げました。初期は1人遣いだった人形操作も、3人遣いが考案され、人形も大きくなり、現在の形式が固定されました。

明治時代に「人形浄瑠璃」が文楽に

植村文楽軒という人が大阪で人形浄瑠璃の興行をやっていましたが、明治5年(1872)に作られた劇場が「文楽軒」の名にちなんで「文楽座」と命名されました。明治時代までに人形浄瑠璃の劇場は激減していましたが、明治20年頃には、

対立する座も旗揚げし黄金時代が再来しました。技芸も研ぎ澄まされ、人形浄瑠璃の伝統を受け継いだ文楽座が残り、「文楽」が人形浄瑠璃の代名詞から同意語へとなっていくのです。



人形遣い

1体の人形を3人で

舞台中央では人形達が活躍しますが、1体の人形は「主遣い」「左遣い」「足遣い」の3人で操ります。この3人が一心同体になったとき、木と布で作られた人形が、人間よりも人間らしく見えてくるのです。

【主遣い】人形を左手に託し、左手で人形の顔の表情を作り、頭と体を動かす。右手で人形の右手を動かす。人形の首で微妙なサインを出し、左・足遣いに次の動きを伝える。主要な場面では顔を出して登場する。足遣いの姿勢が楽になるように、人形の大きさに合わせた(高さ17、35センチ)舞台下駄を履いています。

【左遣い】右手で、人形の左手を動かす。左手で

小道具を取り出す。重い人形の場合は左腹部を支え、主遣いをサポートする。黒衣姿で目立たないようにしている。

【足遣い】両手で人形の両足を動かす。女性の人形は足がないので、歩いているように着物の裾を動かす。黒衣姿で人形の後から中腰の姿勢。

いろいろな表情を

人形の頭のことを「首」といいます。よく乾燥させた檜で作られている首は約70種類もあり、男女、年齢、役柄、性格等で分類されています。中には肩が上下したり、目が左右に動いたり、口の開閉など、いきいきとした表情が出るようからくりが施されているものもあります。人形内部にあるうなづきの糸を引く主遣いの微妙な動きでいろいろな表情が出せます。

